

# ゴヨウマツ、ヒメコマツ、キタゴヨウの学名と和名に対する提案

本多啓七

## 1. 我が国のゴヨウマツ、ヒメコマツ、キタゴヨウの学名と和名の混乱

マツ科には9属あるが、その中のマツ属 *Pinus* は五葉松類と二葉松類の2亜属に区別される。

富山県に産する五葉松類は、山岳地帯ではハイマツ、ハッコウダゴヨウ、チョウセンゴヨウ、また立山の下小平、上ノ小平ではオオシラビソ、タテヤマスギ、クロベ、コメツガなどの混交した疎林の中に以前はヒメコマツ、現在はキタゴヨウと呼んでいる五葉松類がある。また朝日町打谷、相ノ又、入善町負釣山、大山町鳥ヶ尾山、八尾町白木峰、上平村葎島、タカンボウ山等の標高500m~700mの低海拔の山地にこれと違った五葉の松が自生している。

このキタゴヨウと五葉の松の区別が植物学者によって下記のように混乱をきたしている。

- (1) 工藤祐舜編—日本有用樹木分類学(1922年)
  - a. ごえふまつ *P. pentaphylla* Mayr — 本州、北海道に分布
  - b. ひめこまつ(まるみのごえふ)—本州南部より四国、九州に分布  
*P. Himekomatsu* Miyabe et Kudo.
- (2) 岩田利治、草下正夫共著—邦産松柏類図説(1952年)
  - a. ゴヨウマツ—学名は(7)のaと同一、分布も(7)と同一
  - b. ヒメコマツ—学名は(7)のbと同一、分布も(7)と同一
- (3) 牧野富太郎著—牧野新日本植物図鑑(1961年)
  - a. ごようまつ(ひめこまつ)—学名、分布とも(7)のaと同一
  - b. きたごよう—学名は(7)のbと同一、分布は中部以北の山地
- (4) 矢頭 献著—図説樹木学(1966年)
  - a. ヒメコマツ *P. pentaphylla* Mayr — 北海道より中部地方までに分布
  - b. ゴヨウマツ(ヒメコマツの変種)—中部地方より九州までに分布  
中部以上の裏日本、北海道になし  
*P. psntaphylla* Mayr var. *Himekomatsu* Makino
- (5) 奥山春季著—原色日本野外植物図譜(1974年)
  - a. ごようまつ(別名)きたごようまつ—北海道、本州(北中部)に分布  
*P. parviflora* Z. var. *pentaphylla* Henry
  - b. ひめこまつ(まるみのごよう)—東北地方の南部から中部地方の大平洋側、近畿から中国、学名上の母種  
四国、九州に分布

*P. parviflora* S. et Z.

- (6) 上原敬二著—樹木大図説(1975年)
    - a. ひめこまつ b. ごえふまつ—学名及び分布は(7)と同一
  - (7) 大井次三郎著—日本植物誌(1978年)
    - a. ヒメコマツ(ゴヨウマツ)—北海道より九州までに分布  
*P. parviflora* S. et Z. (*P. pentaphylla* var. *Himekomatsu* Makino)
    - b. キタゴヨウ—分布の記載なし  
*P. pentaphylla* Mayr
  - (8) 北村四郎、村田源共著—原色日本植物図鑑本編(II)(1979年)
    - a. ゴヨウマツ(ヒメコマツ)—本州(関東、中部以西)四国、九州  
*P. parviflora* Sieb. et Zucc.
    - b. キタゴヨウ—本州(中部以北)、北海道  
*P. var. pentaphylla* (Mayr) Henry
- 以上の如く学名と和名が混乱しているが、この原因は、シーボルトとツカリニー両氏著の日本植物誌に記載の *P. parviflora* はヒメコマツ、ゴヨウマツ、ハイマツを混同して同一視したことによるようである。
- ## 2. 五葉松類の分類に対する各植物学者の見解
- 混乱の五葉松類に対する各植物学者の見解を整理すると下記の如くなる。
- 1) ゴヨウマツとヒメコマツとは別種とする説
    - (1) マイル氏—ヒメコマツ *P. parviflora* S. et Z. を承認  
—ゴヨウマツ *P. pentaphylla* Mayr と命名
    - (2) 工藤、宮部両博士—ヒメコマツ *P. Himekomatsu* M. et K.  
—ゴヨウマツの学名はマイル氏と同一
    - (3) 館脇博士—ヒメコマツ *P. Mayr* Tatewaki  
ゴヨウマツ *P. pentaphylla* Mayr
  - 2) 同一種とする説—ウイリスン氏は *P. parviflora* S. et Z. 使用
  - 3) 変種の関係なりとする説
    - A 牧野博士、大井博士、宮脇氏、岩田、草下両氏。
      - ① ゴヨウマツはキタゴヨウ *P. pentaphylla* Mayr
      - ② ヒメコマツ(ゴヨウマツ)の学名は上記の変種  
*P. pentaphylla* Mayr var. *Himekomatsu* Makino

B 北村四郎、村田源の両氏

キタゴヨウはゴヨウマツ(ヒメコマツ)の変種、キタゴヨウの学名 *P. parviflora*  
Sieb. et Zucc var. *pentaphylla* (Mayr) Henry

4) 造園家の説

葉が短く密生するものヒメコマツ

葉が長く樹形にしまがないものゴヨウマツ

3. 不備な分布配置図と分布説明

1) 原色日本野外植物図譜では、ヒメコマツは東北地方の南部から中部地方の太平洋側、近畿から中国、四国、九州に分布すると説明し、その分布配置図をあげている。

2) 日本の樹木図鑑においても上記と同様である。

3) 日本の植生図鑑ではヒメコマツは、本州(福島県以西)四国、九州の太平洋側山地のやせ尾根に生育する。また中部の日本海側、東北、北海道ではこれに似たキタゴヨウと代わると記載されている。

4) 原色日本植物図鑑ではゴヨウマツ(ヒメコマツ)は、本州(関東、中部以北)四国、九州。キタゴヨウは、本州(中部以北)北海道と記されている。

4. 富山県にもゴヨウマツ(ヒメコマツ)とキタゴヨウが分布している。

5. 混乱の五葉松類を調査研究するための提案

以上の混乱を防ぐために下記のことを提案する。

1) 和名には分布が広く、南にかたよっている南方型をミナミゴヨウマツ、また分布が狭く北にかたよっている北方型をキタゴヨウマツとする。

2) 学名は次の如く一定にする。

○ミナミゴヨウマツ

*Pinus parviflora* Sieb. et Zucc.

○キタゴヨウマツ

*Pinus parviflora* Sieb. et Zucc. var. *pentaphylla* Henry

以上によって、この五葉松類の混乱を防止することが、日本における五葉松類の内容を正確にし、さらに、その分布状態や植生を、これによってはじめて明確にすることが出来る。

今まで、野外調査のさい、この五葉松類の内容に疑念を抱き、その判定に難儀してきた者として、これらの和名と学名の統一の必要性を痛感して、ここに私案を提案した次第である。

## 入善町負釣山の植生について

本 瀬 晴 雄  
(朝日町立朝日中学校)

### I 負釣山について

負釣山は、富山県東部(下新川郡入善町)の黒部川中流右岸にある、標高959.3mの山である。北側から東側は小川に、西側は舟川にはさまれた位置にあり、南側からは黒部川の支流、音谷が突き上げている。

この山への登山道は、最も普通には、舟見の町から舟川を逆のぼり、尾根あるいは谷のコースを登る方法である。

地元の人びとは、この山をオイツル、あるいはオイツリと呼んでいる。昔はオイツルシと呼んでいたという。

登山口の舟見町は、昔は旧北陸街道の宿場町として栄え、街道沿いの松や本陣跡で、当時の繁栄をしのぶことができる。

後立山連峰(白馬連峰)の北端は、親不知の海食崖で日本海に没するが、西側の山なみの一部は、この負釣山を最後に黒部平野に没している。

このように、負釣山は白馬連峰の続きにあるため、大形哺乳類(ニホンザル、ツキノワグマ、カモシカ)の行動範囲の中にあり、昭和60年6月23日、生物学会現地研修会で登ったときも、ところどころに真新しいクマの糞やタカノツメの幹につけられたクマの爪跡を見ることができた。

また、雪どけの頃にカモシカが、舟見の近辺や小川温泉に現れることは、それほど珍らしいできごとではない。

### II 負釣山の植物相

生物学会現地研修会の集合地であった愛本橋のたもとから、舟見を経て舟川を逆のぼり、展望コースの登山道入り口(標高約400m)に至るまでの間には、ヤブツバキクラス域のヒメアオキーウラジロガシ群集、ケンボナシーケヤキ群落谷あいには点在し、それらの間は、代償植生のサイゴクミツバツツジコナラ群落、オオバクロモジミズナラ群落、スギ植林、アカマツ植林でおおわれている。

